



カモやドジョウを田んぼに放つのは、なぜ

草取りや害虫退治に役立つから

イネを田んぼで育てるのに、たえず生えてくる雑草の草取りは、人手のかかる大変な作業です。そのため、雑草が生えなくなる除草剤や、イネの害虫を退治する農薬が大量に田んぼにまかれたところがありました。ところが、これらの薬剤は、農作業をする人の健康を害する、できた米に残って食品として不安である、などの問題が出てきました。

農薬を使わない米作りの名案として、カモや、コイなどを田んぼに放つ方法が、あちこちで行われています。ここでいうカモは、アヒルとカモから生まれたアイガモです。

アイガモは2回役に立つ

アイガモは、水田を泳ぎながら、雑草を食べてくれるのです。くきのかたいイネは食べないので、草取り役にはつごうがよいわけです。水草や害虫も食べてくれますし、ふんは肥料になり、水かきでどろをかきまぜてくれるので、どろの中に空気が送りこまれて、イネの発育により効果があります。おまけに、秋になると、太ったかもなべ用のカモに成長するから、農家の人には喜ばれています。コイの幼魚も、イネの害虫を食べ、虫を探して土をほりかえし、雑草が生えるのを防いでくれます。

ドジョウは副産物

農薬がなかったころは、水田には、ドジョウがいるのはあたりまえでした。農薬使用がへってきて、最近の田んぼは、ドジョウもすめるようになりました。ドジョウは、水田のどろの中にもぐり、どろをかきまぜ、空気を送りこんでくれます。どろの中の小動物やいろいろなものを食べ、よいどろを作ってイネの生育に役立っています。さらに、冬には、よく育ったドジョウが、どじょうなべの材料になります。(監修・今泉 忠明)

